
魔女のハイヒール

狼之羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女のハイヒール

【Nコード】

N0435D

【作者名】

狼之羊

【あらすじ】

中年の会社員である神林は真紅のハイヒールを拾って……？

写真のように、何年経っても変化のない場所だ。

そこを神林は肩を落として歩いていた。

持ち主の破産か何かで廃墟となったビルが立ち並ぶ、灯り一つ灯らない寂れた細道だった。

この道を通るようになってもう10年以上経つが、コンクリート壁の色も、散らばったガラスの破片の位置も、漂う空気さえここでは留まっているがする。

そういう場所だった。

神林がこの道を見つけたのは偶然だった。

会社の帰り道、上司の執拗な叱責を受けてくさくさしていた。エリート大学出の自分の能力を決して疑わない気質がある年下の上司は、鬱々としている神林の顔を見るだけで怒鳴り散らす。10年以上経った今では、当時の上司は出世して、もう顔も見ない。

その頃すでに40を越えていた神林は、出世などもう頭の中に存在しなかったが、そう頭ごなしに怒鳴られては気が滅入るのを止められなかった。

通りは会社帰りのサラリーマンやOLで賑わっていて、神林は顔をしかめた。その喧騒が心に痛いほど響き渡るのだ。

神林は独り身で、それは当時も今もだった。40代の頃は、結婚という言葉も頭をかすめていた気がする。しかし50を越えた今となつては、神林にもうその気は起こらなかった。

いつまでもうだつの上がない平社員だったが、それで会社に文句を言った事はない。

平の給料で困るような家族もないのだ。

毎日はずただの繰り返しだった。会社と自宅アパートを行ったり来たりする事で日々は流れ、敷かれたレールを走るトロツコのように、

その日々は逸れる事がなかった。

神林がその道を見つけたのはそんな時だったのだ。

今までになく、ひどく気落ちした気分を抱えて、早く帰る事よりもとにかく人を避けたい気持ちに駆られた。

神林はどんな人混みを避けて行つた。半分ヤケになつて人を避ける事に集中した。

どれだけそうして進んだらうか。

誰もいない、灯りすらない寂れた細道に神林は立っていた。

それがこの道との出会いだった。

それ以来、神林は時々この道を通るようになった。

何の灯りもないのに、道はいつも薄明るく、大して離れてもいないのに、通りの喧騒も聞こえてこない。

神林はそこを時間をかけてゆっくり歩いた。自分の靴音だけが高くなり響くのを聞くと何故か心が安らいだ。

疲れているのだ、と神林は思った。こんな事に安らぎを感じる自分は、疲れている。

人との関わりに、あるいは人生に。

神林は胸を針で刺した様なチクツとした痛みが通りすぎるのを感じた。

疲れるだけの人生だったとは、決して思いたくはない。

例えばそれが事実でも。

神林はふと足元にやっていた視線を上げた。

何か異物の気配を感じたからかもしれない。

月夜に照らされて青白いばかりのコンクリート地面に、ぼつんと真っ赤なものが落ちていた。

最初、血かと思つてしまった程、生々しい赤色だった。

しかし近付いてみれば全く思つてもみないものが落ちていた。

真紅のハイヒールである。それも右足の方だけだった。

街中でもここまでケバケバしいものを見掛けないだろう。それをま

さか廃墟街のこの細道で見付けるとは何事だろうか。

十何年通って初めての、しかも幾分異様な変化だった。

思わず神林は辺りを見回した。無意識に落とし主を探そうとしたのだが、道に誰もいない事は先程から自分が一番わかっている。

という事はこの靴はどこから来たのか、もしや廃墟の中に人がいるのか。

神林はハイヒールが落ちていた真上を仰ぎ見て、あつと声を上げた。廃墟の屋上に人が立っている。しかもその体は錆びた鉄柵から大分乗り出しているではないか！

一瞬呆けた様にぼんやりした後、神林は乱暴にハイヒールを拾い上げると、猛然と走り出した。神林が最後に走ったと認識しているのは、今自分が走っている事が信じられない程昔の事である。

ビルの出入り口は、かつて自動ドアだったらしいガラスの扉が半開きになっていた。

むりやり通ると、くたびれたスーツのボタンが引つかかってどこかに弾け飛んだ。

エレベーターが動くはずもなく、神林は階段をやかましい音を立てて駆け登って行った。

心臓が自分のものと思えないほど激しい鼓動を打っている。もしかしてこれ以上走ったら破裂して自分は死ぬんじゃないだろうか。それ程今、苦しい。半世紀も生きてこんな苦しみを味わったのは初めてだ。

しかし、神林は何故か止まる気にならなかった。

苦しければ全力を注ぐのをやめる、当たり前だ。苦しいことは誰しも避ける。

ましてや、ただの一瞬見た他人のために注ぐ全力など。

わからない。神林は走りすぎてぼんやりする頭でそう思う。

見間違いだったのではないか。そうだ、じっくり見たわけではないのだ。見間違ったとしてもおかしくない。

実物を確かめるように、手に持つ真紅のハイヒールを握り締めた。

冷たい感触が返ってきた。

まだ足は、全力疾走を続けている。

屋上に出る扉は壊れて外れていた。

長いトンネルの出口のように、月の光が一杯に差し込めていた。

もう神林の足は限界をとうに超えて、ガクガク震えていた。

それでも神林は無心で階段を登る。一段一段、何も考えずとも足が登っていく。

速度は歩いてるのと変わらないほど落ちていたが、神林の心はまだ全力だった。

月の光が全身を照らす。

神林はついに登りきった。

目にしたのは巨大な月がただびろい屋上をこうこうと照らしている所だけだった。

屋上には誰もいない。

下を覗き込み、飛び降りたのでもないとなると、いよいよ確実にあった。

突き抜けるような風が、神林の滝のように流した汗を冷やしていく。大きな口を開けて息をする神林から、呻きとも笑いとも取れる声がこぼれた。

見間違いだっただの。

初めから、屋上に人などいなかった。

神林はへたりと座り込んだ。

ベタベタに汗をかいた手から、真紅のハイヒールがゴトリと落ちた。息の整った神林は、改めて大声で笑った。

わざと笑い始めたのだが、途中から本当に笑いが止まらなくなり、涙が出るほど神林は笑った。

その笑いは何故か、少しも自嘲的な感情を含んでいなかったのである。

ヒィヒィいいながら、神林はよろよろ立ち上がった。

ひどい筋肉痛が始まっている。

明日会社に出勤できるだろうか。

そう思つて神林はまた大きく笑った。

ゆっくりゆっくり、神林は階段を下り始めた。

神林はその後、凄まじい筋肉痛で三日も動けなくなった。

驚いたことは、その三日間、見舞いの電話や訪問者が絶えなかったのである。

自分は会社から給料泥棒ほどにしか思われていないだろうと思つていた神林には少し信じられない現象だった。

確かに顔は広がった。愚痴を言い合う飲み仲間も少くない。

自分が思うことは人が思つていゝとは限らない。そういう事なのだろうか。

神林は、屋上にうつかりあの真紅のハイヒールを置いてきたのが氣になつて、一度だけ、今度はゆっくりあの屋上に登つてみた。

すると、どうしたことが、そのハイヒールすらどこにも見当たらないのである。

これで、あの夜見たものは全てなくした。

確信を持つていえるのは、神林が全力を尽くして階段を登り、凄まじい筋肉痛をこさえた事だけだった。

神林はそれ以来、あの細道を通つていない。

意識して行つていないのではなく、いつの間にか、行き方も忘れてしまったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0435d/>

魔法のハイヒール

2010年11月16日18時30分発行